

# 「ニセ薬」商人を野放しにするな

## Killers on the loose

Nature Vol.434(123)/10 March 2005

開発途上国全体に深刻な問題が存在する。市場に偽造薬品が出まわり、本物との区別ができないのだ。援助国、当事国の政府、製薬業界による対応が求められている。

東南アジアを訪れたことがあるならば、ニセモノ商品であふれた店が立ち並ぶ街角に行ったことはないだろうか。まさにそこでロレックス時計のニセモノや海賊版DVDを買った人もいるかもしれない。アジアではよくあることだが、これは確かに違法行為である。それでも多くの観光客は、ニセモノ商人をロビンフッドのような義賊ととらえている。つまり、裕福な欧米企業から利益をかすめとり、地元の現金経済を潤す存在だと考えられているのだ。

しかし、アジアのニセモノ文化にはもう1つの側面がある。それは普通、観光客の目に触れることはない。ラベルに書かれた有効成分の量が足りなかったり、全く含まれていなかったりする偽造薬品が薬局にあふれているのだ。このインチキ薬は、ほとんどが中国かインド製で、アフリカやその他の開発途上国にも輸出されている。この商売には善意のかけらも見られない。偽造薬品は慢性疾患を引き起こし、孤児や未亡人を生み出す。関係している連中は冷酷非情で、人間の命がどうなろうとあまり気にしていない。そしてこの商売は、こうした現状を見て見ぬふりする腐敗した役人がいるところで繁盛する。

だが幸いなことに、開発途上国での偽造医薬品の問題についての認識が高まってきている。一部の最貧国で医療水準の向上に努力している研究者や医師の助力によって、この話に注意が呼びかけられている (*Nature* 2005年3月10日号 p.132 参照)。最近では、この問題点に取り組むための複数のプログラムが創設された。例えば、国際商業会議所は2003年に偽造医薬品イニシアチブを設立し、偽造薬品に関する情報収集や情報交換を行っている。

多国籍製薬会社も、この問題との関わりを持ち始めている。そのうちの数社が集まって医薬品セキュリティ協会が設立された。ここでは刑事訴追を行う可能性も念頭において、偽造医薬品の製造に関する情報を集めている。製薬会社がこのような動きに出た背景には、先進国の裕福な消費者をターゲットにしてインターネット上で取引される、偽造医薬品の売上の増加がある。これは会社の売上に影響し、大手

製薬会社の経営を左右するような問題となっている。

それでも製薬会社各社は、商売上の秘密情報を他社に開示することには慎重だ。この問題が報道されることによって自社製品に対する消費者の信頼が損なわれることを恐れ、社内データをなかなか公表しようとはしない。また、偽造薬品による人的被害の最も深刻な開発途上国での偽造薬品問題に対する取組みにも身が入っていない。これに対して、偽造薬品の脅威と戦う団体は、より積極的な展開をしたいのだがそのための資源が足りないと語る。各国政府と製薬会社は必要とされる資源を提供し、偽造薬品の業者を野放しにしている国々に対する圧力を強め、悪徳業者に法の裁きを受けさせるべきである。

ある欧米系政府機関の職員は、カンボジア国内での偽造薬品問題や盛んな偽造薬品取引の背景となっている腐敗した環境に注目したために同国政府高官の怒りを買って、上司にこの問題から手を引くよう言われたという。援助プロジェクトは受入国側の理解がなければ実施できないので、この上司はプロジェクト全体が危うくなってしまうことを心配したのだと思われる。

しかし、このような姿勢は間違っており、許されるものではない。偽造医薬品商売の背後には、厳しい取り締まりと重い刑罰のために商売替えをした、かつての麻薬密輸業者が多く介在している。このような邪悪な組織的犯罪者は、事実上の殺人を犯しているにもかかわらず、処罰を免れている。このような状況を許すべきではない。

解決策は簡単には見つからない。偽造薬品の問題が最も深刻な国々では、誰が問題を解決しようとする側の人間で、誰が問題を起している側の人間なのかを区別できないこともある。だからといって何もしないでよいわけではない。哲学者エドモンド・バークが言ったように、「悪を栄えさせるための必要条件はただ1つ、善人が何もしないでいること」なのである。 ■